



Data 2025-40

監督: ウィリアム・ワイラー
 原作: ルー・ウォーレス『ベン・ハー』

出演: チェールトン・ヘストン/スティーヴン・ボイド/ジャック・ホーキンス/ハイヤ・ハラリート/ヒュー・グリフィス/マーサ・スコット/キャシー・オドネル/フランク・スリング/サム・ジャッフェ/フィンレイ・カーリー/テレンス・ロングドン

👁️👁️ みどころ

とんでもない大スペクトルシーンを売りにした歴史的名作の“エピック”ものは、大スクリーンで観たいもの。もっとも、本作は戦車競技映画にあらず！「イエス様もの」だから、その確認もしっかりと！

海戦シーンにも注目し、天国から地獄へ、そして地獄から天国へと大きく揺れ動く主人公ベン・ハーの半生を、救世主との接点とイエスが見せる奇跡の数々に思いを馳せながら、しっかり考えたい。



■□■「午前十時の映画祭 15」で格別の1本を鑑賞！■□■

「もう一度スクリーンで見たい」、そんなファンの声を現実化した「午前十時の映画祭」は、特に素晴らしい傑作映画を選び、全国の映画館で1年間にわたって連続上映するもの。そして、「午前十時の映画祭 15」は、これまで「午前十時の映画祭」で上映した全316作品の中から、お客様に投票いただいたリクエストをセレクトしたものだ。そんな選りすぐりの25作品を、全国の劇場を「GROUP A」と「GROUP B」に分け、「GROUP A」と「GROUP B」で交互に上映されるが、そのトップバッターに選ばれた2/25の映画が『ベン・ハー』（59年）と『アラビアのロレンス』（62年）だ。

1959年に制作され、1960年に公開された本作は、第32回アカデミー賞で作品賞、監督賞、主演男優賞、助演男優賞をはじめ史上最多11部門を受賞した。また、54億円もの制作費を投入した本作は、212分の大作ながら、全米公開後、全世界大ヒットとしたため、この映画1本で倒産寸前だった製作会社MGMを一気に立て直させたそうだ。私は『週刊20世紀シネマ館』全60冊を完備しているが、そのNo.4（2004年2月19日号）、「1960・昭和35年①」が、「1960年の名画」として収録している5作品の1本が『ベン・ハー』だ。

私は「午前十時の映画祭 15」で取り上げた作品をほとんど鑑賞済みだから、わざわざ時

間を割り、お金を払ってまで観るところまでいかなかったが、今回は何が何でも劇場へ！

ちなみに、私は毎晩寝るときに『淀川長治 映画音楽館』を聴きながら眠っているが、その中に『ベン・ハー序曲』も入っている。したがって、本作では冒頭にそれを聴くのが楽しみだったが、劇場が暗くなるとスクリーンは暗いままで、『ベン・ハー序曲』の壮大な楽曲が流れ始めた。名刺よりも小さい iPod で名曲を聴きながら眠るのもいいものだが、やはり『ベン・ハー序曲』のような壮大な名曲は大劇場で絶好の座席で聴くのが最高！そんな『ベン・ハー序曲』の響きが終わると、スクリーン上は今からちょうど 2000 年前のユダヤがローマの支配下にあった紀元 1 世紀の世界に……。

■□■エピック映画とは？学校推薦でイエス様ものを次々と■□■

『映画検定・公式テキストブック』（2006 年・キネマ旬報社）は、「第 4 章 映画の用語集」（194 頁）で「エピック」について、次のとおり解説している。すなわち、

過去の歴史に取材して、実在した人物だけでなく架空の人物たちの“現実を誇張した”冒険、活躍を描く。聖書、ギリシャ神話、ローマ神話や伝説に基づいたりして、ヘラクレス、ジンギスカン、ベン・ハーなどの英雄が大活躍する。「十戒」（56）、「ベン・ハー」（59）、「トロイ」（04）などが代表的な作品。大掛かりなセット、多数の特別な衣装・小道具、膨大なエキストラが登場し、そのスケールで圧倒する。映画のスペクタクル性を最も発揮するジャンルである。特に古代を舞台にしたものは、登場人物が剣を持ち、サンダルをはいていることから、「剣とサンダル」（Sword and Sandal）映画と呼ばれている。

私が 1961 年 4 月に入学した愛光学園（中学・高校）は、カトリック聖ドミニコ修道会のロザリオ管区が運営する、男ばかりの中高一貫教育の進学校だった。そのため、宗教の授業があったし、父兄同伴なしの単独での映画鑑賞は禁止だったが、逆にキリスト教関係の映画は学校推薦とされ、「イエス様もの」は鑑賞することが勧められていた。そのため、私は『十戒』（56 年）、『ベン・ハー』（59 年）、『キング・オブ・キングス』（61 年）、『バラバ』（61 年）、『偉大な生涯の物語』（65 年）、『天地創造』（66 年）等の「イエス様もの」はすべて鑑賞している。また、私は「イエス様もの」ではないエピック映画たる『スパルタカス』（60 年）、『エル・シド』（61 年）、『クレオパトラ』（63 年）、『トロイ』（04 年）等もほとんど鑑賞している。

■□■本作は戦車競技映画にあらず！本作はイエス様もの！■□■

スティーブン・スピルバーグ監督の『プライベート・ライアン』（98 年）では、冒頭 20 分間のノルマンディ上陸作戦における「オマハ・ビーチ」での壮絶な戦闘シーンに圧倒されたが、1960 年に公開された 70mm 大作たる本作が全世界で大ヒットし、アカデミー賞最多 11 部門を受賞した最大の理由は、「インターミッション」直後に登場する戦車競技のスペクタクルシーンの魅力にある。多くの日本人は、美しいサラブレッド馬たちによる競馬が大好きだが、本作の戦車競技は 4 頭の馬に曳かれた二輪戦車による競争だから、その

スケール感がすごい。

『グラディエーター』(00年)、『グラディエーターII 英雄を呼ぶ声』(24年) (『シネマ57』73頁)では、古代ローマ帝国時代のコロシウムやグラディエーター(=剣闘士)の物語に焦点が当てられたが、本作では2年をかけて映画史上最大の競技場のセットが作られ、桁外れの数のエキストラとともに古代ローマの戦闘競技の再現がされたわけだ。その結果生まれたのが、“映画史上最もスリリングな15分間”だが、それについて前記の『週刊20世紀シネマ館』は次の通り解説している。すなわち、

3000にも及ぶ巨大なフィルムと
造力あふれる巨大セットの鼓々
砂塵を巻き上げ、5頭の馬は又かれた列
台もの一輪車だが、古代ローマの競技場を
みる。車上で踊り合いなぞ、闘いに敗れ
た者たちは次々と大衆にたたきつけられて
いく。命を懸けた闘いながらの社会主義者
のシーン、この作劇のハイライトである。
戦後10年、製作期間6年、総製作費1
500万ドル。「ベン・ハー」は、当時と
しては破格の巨額で製作された。その大掛
かりなセットやケタはずれな数のエキストラ
らによる新装シーンが大衆に押しこめられ
ると、観客はあまりのスケールに大層に
息を呑んだ。まさに、古代ローマ時代の再
現……。古代エルサレムの闘技場をモデル
にした競技場のセットの建設には、ローマ
の中心地から300のところにあった7万5
000坪の石切り場に1000人以上の労働
者を投入、2年をかけて、映画史上最大
のセットが作られたのである。
監督のウィリアム・ワイラーは、俳優や
スタッフに何十回もの台詞の言い直しやシ
ーンの繰り返しを命じ、撮影に用いられた
フィルムはなんと3000回、全部上巻する
とる日数にも及ぶ長さだったという。アカ
デミー賞を11部門を受賞するという記録的
な作劇「ベン・ハー」は、こうして完成し
たのだった。

他方、見逃してならないのは、本作には「キリストの物語」というサブタイトルがついていることだ。Wikipediaはその点について、「この映画はタイトルが出る前にキリストの生誕で始まり、キリストの処刑とともに復活で「ベンハー」の物語が終わり、宗教色が色濃く出ている。」と解説している。「イエス・キリストの誕生」は世界で最も有名な物語だが、本作冒頭に登場するそれは、私が幼稚園の頃や中学生になった時によく聞かされた物語であり、よく見慣れた風景だ。222分の本作で、最初から最後まで救世主を探す博士、バルサザール役を演じている俳優がフィンレイ・カリー、そして、ユダヤの貴族の身分から一転して奴隷としてガレー船の漕手として売られていくベン・ハーに旅の途中で水を与える青年(=イエス・キリスト)役を演じている俳優がクロワード・ヒーターだ。

興味深いのは、この時代の「イエス様映画」にあっては、イエス・キリストの顔をスクリーンに出すことは厳禁とされていたこと。それは現人神(あらひとがみ)である(明治)天皇の顔をスクリーンに出すことが厳禁とされていた、邦画界と同じ理屈だ。もっとも、その後イエス・キリストについては『キング・オブ・キングズ』(61年)等で、明治天皇については『明治天皇と日露戦争』(56年)で軌道修正されたことは周知の通りだ。

それはともかく、ややもすれば本作は大スペクタクルの「戦車競技モノ」と思われているが、実はそうではなく、本作は「イエス様もの」であることを肝に銘じる必要がある。とりわけ、戦車競技でベン・ハーが宿敵メッサラ(スティーヴン・ポイド)に勝利した後は、ベンハーの母親ミリアム(マーサ・スコット)と妹ディルザ(キャシー・オドネル)がライ病に罹患し、死の谷に潜んで生きていることを、かつての奴隷だった女性エスター

(ハイヤ・ハラリート) から聞かされた後の本作のストーリーは「イエス様映画」の色が強くなっていく。十字架を背負って歩くイエス・キリストに水を与えるベン・ハーの姿や、現実に訪れたイエス・キリストの処刑と復活、それに伴う母と妹の奇跡的なライ病からの回復等々、本作はラストに向けて、「イエス様もの」色を強めていくので、それに注目！

■□■海戦シーンにも注目！天国から地獄へ！地獄から天国へ■□■

『明治天皇と日露戦争』では、もちろん日本海海戦の姿がクライマックスだった。またNHK大河スペシャル『坂の上の雲』でも、そのクライマックスは日本海海戦だった。他方、エリザベス・テイラーがクレオパトラ役を演じ、レックス・ハリソンがシーザー役を、リチャード・バートンがアントニー役を演じた『クレオパトラ』(63年)では、後半最初のハイライトがアクティウムの海戦だった。ローマ帝国の将軍でありながら、シーザー亡き後、エジプト女王クレオパトラと結んだアントニーは、シーザーの養子オクタ비아ヌスとのアクティウムの海戦に臨んだが・・・。

『天国と地獄』(63年)は黒沢明監督の名作だが、本作に見る主人公ベン・ハーの人生はまさに“天国から地獄へ”、そして“地獄から天国”への典型だ。前者はローマの属州になっているユダヤに新たなローマ総督を迎えた際、ベン・ハーのお屋敷から屋根瓦を落下させたことによって、ベン・ハーは奴隷としてガレイ船に送られ、母と妹は地下牢に入れられてしまったことだ。そして後者は、ローマ海軍総司令官クインタス・アリウス(ジャック・ホーキンス)がカルタゴとの海戦に臨むについて、ある縁によって、足の鎖が外された漕手のベン・ハーが海に放り出されたアリウス將軍の命を救ったことによって、アリウスの養子にまでなったことだ。

人はさまざまな機会におけるさまざまな人との出会いによって新たな人生が開けるものだということは、年齢も76歳になり、弁護士歴も50周年を迎えた私の偽らざる実感だが、それにしてもベン・ハーの天国から地獄へ、地獄から天国への振れ幅はすごい。ローマ帝国時代の海軍の戦いを支えたのが、船底で鎖につながれながらロールを漕ぐ数多くの漕手(奴隷)であったことを確認しながら、マリウス將軍が指揮する海戦の勝敗によって、ベン・ハーの“地獄から天国へ”の新たな道が開かれていった“奇跡”をしっかりと考えたい。イエス・キリストが人間たちに見せた奇跡(神のみわざ)にはさまざまなものがあるが、「イエス様もの」たる本作の後半では、ベン・ハーとの関わりにおけるその姿をしっかりと確認し、味わいたい。

2025(令和7)年4月16日記